

発表要旨：「瞬間の未完了——拡張ベルクソン主義者西田幾多郎」

平井靖史（慶應義塾大学）

本発表では、ベルクソンの時間哲学と西田幾多郎の哲学を、「瞬間」という概念を軸に比較検討し、両者の思想に新たな光を当てることを試みる。

提題者は、先立つ研究において、ベルクソン研究において従来あまり注目されてこなかった「瞬間」という時間単位の存在に着目し、その重要性を強調した（『世界は時間でできている』）。異なる大きさの「瞬間」が共存するという「マルチ時間スケール」の概念を提示し、ベルクソンの時間論の特徴として捉え直し、ここから「時制」の時間哲学と対比される時間的「アスペクト」のそれとして確立することを試みている。

瞬間論の思想的背景にはデカルトの連続創造説があり、そこでは Laporte の読みに対して Gueroult、Bayssade が打ち出した instant（瞬時）と moment（瞬間）の違いが枢要となる。絶えざる生成消滅の断絶によって定義される連続創造的な物質の時間性は、ベルクソンにおける過去の自動保存の論証において決定的な役割を果たす。だが、instant はたんに理念的な極限と位置付けられるべきなのか。西田哲学との新たな枠組みのもとでの付き合い合わせは、何度も提起されてきた断絶性と持続の問いの再考察を要求する。

他方で、「時間的アスペクト」の観点を導入することで、西田の時間哲学に新たな視座を提供することも期待できる。具体的には、未完了相、完了相、完結相という 3 つのアスペクトの関係性に注目し、特に瞬間性と死の問いを考察する上で、完了相と完結相の区別が時間スケールのダイナミクスを理解する際と同様に、鍵となりうることを指摘する。西田幾多郎の哲学における瞬間の非連続性、切断性、死という側面が新たな解明の場となる。ここで重要なのは、瞬間の死という概念に含まれる二つの意味——「今の断絶」としての切断と、「対象化」という意味での死（小林敏明）——を、時間的アスペクトの観点から取り上げ直すことであろう。西田の内在的否定による断絶的な移行のモデルには、ベルクソンに還元できない側面もありながら、しかしその前提には深いレベルで共通した議論構造が見出せる。これにより、ベルクソンと西田の思想を橋渡しし、両者の哲学における時間概念の豊かさと複雑さを浮き彫りにすることを試みたい。